

○山村 健介¹, 北川 純一¹, 黒瀬 雅之¹, 高辻 華子¹, 山田 好秋¹

¹新潟大院医歯

咀嚼・嚥下は頭頸部の多数の筋の協調活動により遂行される運動で摂食行動の主要な過程である。これらの運動は、脳幹にそれぞれ独立の制御中枢（咀嚼中枢と嚥下中枢）を持ち、基本的な運動パターンはこれら制御中枢で形成される。また、摂食行動に伴って生じる感覚情報のうち、触・圧感覚などの体性感覚は制御中枢の駆動や、反射性に運動出力を調節することで運動を円滑に遂行することに寄与するなどの重要な役割を果たすことが明らかになっている。味覚も摂食行動に伴って生じ、大脳皮質で認知されることで食物の摂取の可否、あるいは美味しい・不味いなどの判断に直接関わる感覚として重要である。しかし、味覚情報が咀嚼・嚥下運動に及ぼす影響についてはほとんど明らかにされていない。

超高齢社会を迎え、寝たきり老人や脳血管障害の後遺症で嚥下機能に障害を持つ患者さんが増加しており、近年の社会的な問題となっている。そのため、食物の物性を変化させることで食塊となった際の凝集性を高め、誤嚥のリスクを低めるというコンセプトの嚥下障害食の開発が進み、嚥下機能障害を持つ患者さんの食物の経口摂取に一定の安全性が担保された。しかし、現在の嚥下障害食には、積極的に嚥下誘発を引き出すという付加価値を与える試みはなされておらず、一步進んだ嚥下障害食を開発する余地は残っている。そこで、我々は新しい概念の嚥下障害食を開発することを目的に、味覚情報が嚥下誘発にいかなる影響を及ぼすかを調べる研究に着手した。本シンポジウムでは、これまでに我々が実験動物およびヒトでの実験を通して得た現時点での知見を紹介したい。